幼稚園の終りころになると、文字をよんだり、書いたりする子どもが多くなる。十分にその段階に達した子どもにとっては、それは新しい世界への前進であるから、その世界を育てるようにしたい。しかし、それは決して半年や一年を急ぐことではないことを同時によく心得ておく必要があると思う。

本誌の清水エミ子氏の観察の中に、字のわかる子どもと、字のわからない子どもと、絵本の見方に相異があることが記されている。字をよみはじめた子どもは、一字一字を拾ってよむことに精力をとられて、絵の見方が浅くなる。それに対して、字を知らない子どもは、同じ絵でも、じっと見つめて、ひとりで長時間絵本にとどまるというような意味の観察であった。これは十分にうなずけることである。字の世界にはいっていない子どもは、絵を素直に見、絵そのものから感じとろうとし、絵そのものをいっそうよく味わうことができても不思議はない。

われわれおとなが、芸術に接する場合にも、その情景の説明や先入知識は、芸術そのものの理解をさまたげることが多いのである。その芸術とは本質的にかかわりのない知識はすてるように努力しなければ、作品そのものの理解が一方的になり、浅くなり、固定化してしまう場合がある。しかし、字を知らない子どもは、おとなのような努力をしないで、絵そのものにふれてゆくことができるのである。

これは絵にかぎったことではない。幼児が文字の世界を知らず、抽象概念も少なく、知識も少ないからこそ、おとなが思いつきもしないような角度からものを見、想像し、力をふるうことができるようなことがたくさんあるに違いない。字を知る前の段階、そこには字で表現することができないような豊かな世界があるにちがいない。そこに文字の文化がつみ重なっていって、文字文化がそのあるべき姿に発展していくことができるのである。

「おさない」ということは程度が低いことではなくて、おさないからこそ、学ぶことのできる特権の世界が豊かにあることを知らなければならないと思う。

（T）

幼児の教育　第六十八巻　第三号

三月号　©　定価八〇円

昭和四十四年二月二十五日　印刷
昭和四十四年三月　一　日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼
発行者　津　守　真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社フレーベル館
〒一〇一　振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします